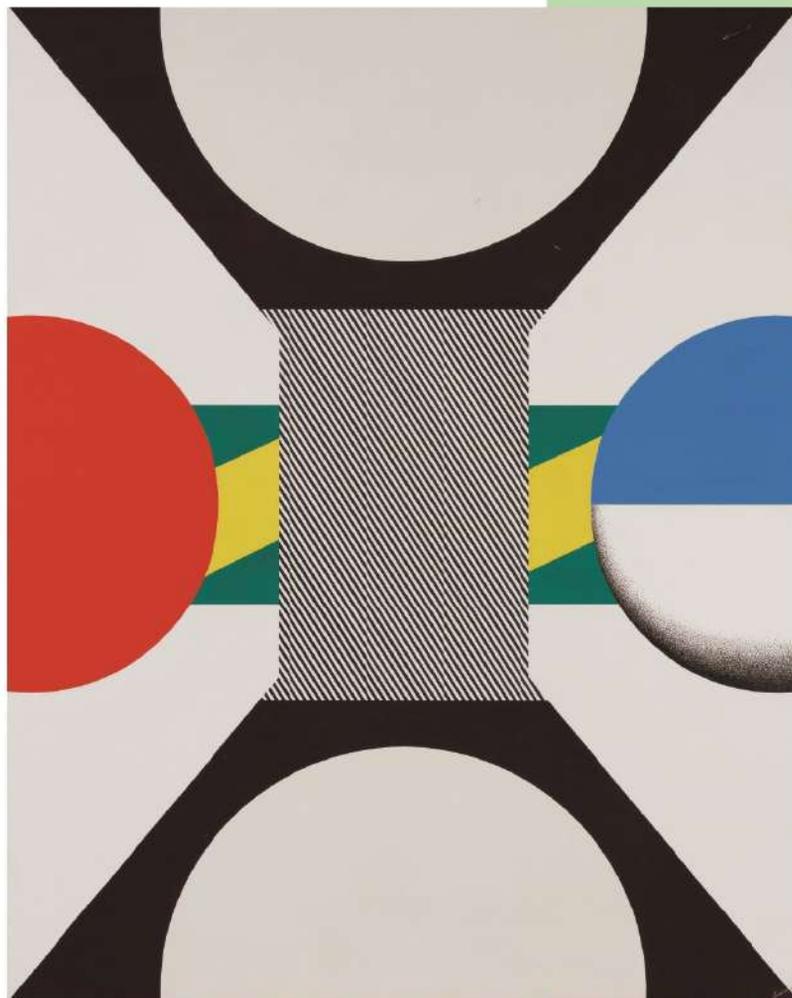


press release

COLLECTION EXHIBITION
Focus on Newly Collected Pieces



香取収「X」(1970年) 広島県立美術館蔵

冬の所蔵作品展

新収蔵作品を中心に

2021年1月2日(土)～4月11日(日) 2階展示室

[開館時間]9:00～17:00(3月31日までの金曜日は19:00まで、4月1日以降の金曜日は20:00まで閉館) ※入場は開館の30分前まで

[休館日]月曜日 ※特別展会期中・祝日・振替休日を除く ※2月22日(月)は展示替えのため閉室

[入館料]一般510円/大学生310円 ※20名以上の団体は一般100円、大学生60円引き

[縮景園共通券]一般610円/大学生350円 ※特別展は別料金

※高校生以下無料 ※当館で開催中の特別展入館券にて無料でご覧いただけます。

※障害者手帳をお持ちの方や65才以上の方、県内の大学に在学する留学生の方などは無料(1階総合受付でお申し出ください)。



広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0084 広島市南区上郷町1-21 TEL:082-225-6246 FAX:082-225-4446

<http://www.hpam.jp/>



【概要】

冬の所蔵作品展 新収蔵作品を中心に

1968(昭和43)年に開館した広島県立美術館は、1996(平成8)年に現在の建物に生まれ変わり、所蔵作品展と特別展という両輪によって美術の魅力を発信しています。当館は開館以来、多くの方々のご協力を得てコレクションを充実させてまいりました。収集重点方針として「広島県ゆかりの美術」「1920～30年代の美術」「日本およびアジアの工芸」を掲げ、現在は総数5,000点を超えています。

さて、今期の所蔵作品展では、昨年度の新収蔵作品を含め、幅広い年代の方々にお楽しみいただける展示を行います。広島にゆかりの深い彫刻家の作品群、文学と密接に影響関係が見られる西洋美術の作品、美術館の裏側である作品の修復保存の一面をご紹介しますシリーズの第3弾、昨年度にご寄贈・ご寄託いただいた日本洋画と日本画そして工芸作品のお披露目展示、広島で育まれた近代から現代にいたる多分野の工芸、5つのテーマで当館コレクションの魅力を引き出します。展覧会会期中には、オンラインによる対話型鑑賞会やインスタグラムのライブ配信などの関連イベントも開催して、新しいアプローチにも挑戦し続けます。

当館は新型コロナウイルス感染拡大防止策を実施して皆様をお迎えますので、ご理解とご協力をお願いいたします。ご来館のたびに新しい美の魅力を発見し、心と癒やされる展示をめざし、今後も努力を重ねてまいります。これからの所蔵作品展にもご期待ください。

【彫刻展示室】広島の彫刻

彫刻という言葉が現代のような使われ方になったのは明治時代も後半になってからのことで、それまでは、神像や仏像のことであったり、人形との区別があいまいなものであったりしました。そうした時代に、彫刻家への道を歩み始めた中谷翫古なかたに がんこ ひらくでんちゆうや平櫛田中は、広島出身の人形師、中谷省古なかたに せいこのもとで彫刻家としての人生をスタートさせます。仏師として修行を始めた圓鑊勝三えんつぱ かつぞうも、生き人形で人気のあった澤田政廣さわだ せいこうに師事して本格的な彫刻家への道を歩み始めました。あるいは、戦前、工業大学でデザインを学んだ芥川永あぐたがわひさしは授業で触れたことがきっかけで彫刻に興味を持ちました。同じころ美術大学で彫刻を学んだ水船六州みずふね ろくしゆうや、さらには、戦後、現代的な教育の中で立体造形として彫刻を学んだ小平胖可こたいら ゆたかや奥田秀樹おくだ ひできらの作家へと、時代とともに彫刻の学び方も変わっていきます。

このたびの展示では、広島に縁の深い彫刻家の作品を通して、さまざまな表現をご紹介します。時代の雰囲気と作家の個性が織りなす作品の多様な魅力をお楽しみください。



奥田秀樹《演奏者》1989年 テラコッタ、鉄、木



【第1展示室】西洋美術と文学

この展示室では、コレクションをお楽しみいただくひとつの切り口として、文学にゆかりのある西洋美術の作品をご紹介します。

他地域と同じく、西洋美術もまた、文学と密接な関係をもちながら展開してきました。特に近代以降は、前衛的な文学と美術が互いに影響を与えあい、新たな表現を生み出してきたのです。たとえば、20世紀を代表する美術運動のひとつ、シュルレアリスムは、当初、文学運動として出発しました。詩人たちが考案した、無意識に浮かんだ言葉を脈絡なく繋いでいく自動記述の手法は、偶然性を活かしたイメージの生成や、モチーフの奇妙な取り合わせといった形で、絵画作品や立体作品にも応用されました。

また、混乱に満ちた両大戦間期、ヨーロッパ精神の源泉である古典古代が一種の秩序として人々のよりどころとなるなか、多くの芸術家が古代の文学、ギリシャ・ローマ神話の世界に主題を求めました。一方、シュルレアリストたちにとっては、フロイトが精神分析論に神話的類型を用いたことから、神話は人間の無意識と結びつく重要なモチーフとなったのです。

他にも、第一次世界大戦後の荒廃したドイツの状況を、18世紀のシラー作の戯曲になぞらえたグロスの版画集《群盗》、詩人でもあった芸術家アルプの彫刻作品など、文学と関わりのある作品を展示します。

言葉とイメージ、異なる表現手段を取りながらも響き合う、両分野の出会いをお楽しみください。



アリスティード・マイヨール《ウェルギリウスの農耕歌》
1937-44年 木版、紙

【第2展示室】こんなこともしています、美術館3

当館ではこれまでも、普段の展示ではお見せすることのない裏方の仕事をご紹介したいと考え、「こんなこともしています、美術館」と題した特集展示を行ってきました(平成17年・平成22年)。今回はその3回目として絵画作品の修復についてご紹介します。

私たちの身の回りにある様々な物と同様、美術作品もまた、時間の経過とともに少しずつ傷んでいきます。紫外線や赤外線をはじめ、ほとんどの光は、絵の具から色を奪い、紙やキャンバスは柔軟性を失います。光以外にも、温度、湿度、埃や虫など美術品の敵を数え挙げるとキリがありません。私たちは、そうした問題を少しでも減らせるように努力していますが、それでも劣化そのものを止めることはできません。そのため、どうしても修復の必要な作品が発生するのです。私たちが過去の美術品を目にして感動するのと同じように、百年後の人々にも、私たちが感動した作品を今と同じ姿で見てもらいたい、という思いのもと、作品ごとに最適と思われる修復を行ってきました。このたびの展示では、油彩画と日本画から修復例を選んでご紹介します。修復によって蘇った、作品本来の美しさをご堪能ください。



南薫造《西洋婦人(C)》油彩、画布



【第3展示室】新収蔵品紹介

この展示室では、昨年度、新たにご寄贈・ご寄託いただいた日本洋画と日本画、工芸作品をご紹介します。

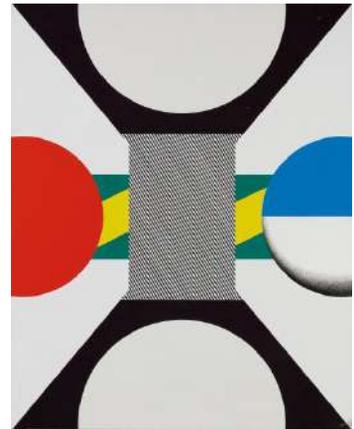
まず、日本洋画では、広島出身の太田忠^{おおた ちゆう}、岡部繁夫^{おかべ はんぷ}、名井萬亀^{ない まき}、佐々田憲一郎の作品を収蔵しました。太田忠は、国鉄勤務の傍ら、自然豊かな山間の風景を好んで描き、機関士画家として親しまれました。名井萬亀は戦前に渡仏し、個性溢れる独創的な作風で知られています。戦前の作品は原爆により殆ど焼失しており、《風景》は貴重な作例です。岡部繁夫は、戦前から中央画壇で活躍した広島を代表する洋画家の一人で、この度の12点の収蔵により、戦前から晩年までの作風の変遷を辿ることが可能になりました。佐々田憲一郎は戦後の備後を代表する画家です。

日本画では、児玉希望^{かほこ}、平田周子^{かほこ}、福田恵一、和高節二(修復のため未出品)の作品が加わりました。児玉希望は、広島を代表する日本画家で、奥田元宋の師としても知られています。平田周子は、戦前に女子美術専門学校で日本画を学び、戦後は女流美術協会展や広島県美術展で活躍しました。福田恵一は、福山市出身で、歴史人物画を得意として帝展での特選を重ねました。

工芸では、広島県竹原市で作陶を続けている今井政之の作品を新たに収集しました。

優れた作品を収集し、後世へと繋げることは、美術館の大切な使命です。作品をご寄贈・ご寄託くださった方々に、改めて御礼申し上げます。

この初お披露目が、作品と皆さまとの素敵な出会いになれば幸いです。



菅井汲《フェスティバル'70》1970年
油彩、画布

【第4展示室】広島の工芸

この展示室では、近代から現代にかけての広島の工芸を総勢29名の作家の作品により概観します。

近代に入ると、西欧諸国では各地で万国博覧会が盛んに行われるようになります。日本でも東京、京都など全国各地で様々な種類の協進会や博覧会が催されるようになり、それらは工芸の担い手にとって新たな発表の場となりました。広島^{ひろしま}の伝統工芸として知られる高盛^{かみじょう}絵の技法を確立した三代金城^{いっごう せい}一國齋は、内国勸業博覧会を中心に活躍し、その名を全国へと響かせました。

一方、明治20年には東京美術学校(現・東京藝術大学)が創設され、地域や伝統の枠を超えて工芸を志す人々が現れるようになり、学校教育によって技術を身に着けた「工芸家」が輩出されていくようになります。そうした近代的な作家の先駆となったのが六角紫水^{ちうかく しすい}や清水南山^{しみず なんざん}らで、彼らは日本の近代工芸の草分けとして大きな足跡を残しました。

続く大正・昭和・平成の時代も、伝統のわざや美を発展させた新しい時代の工芸が次々と広島に芽吹き、育ち、近年は平成30年に今井政之、令和2年に奥田小由女が文化勲章を受章するなど、日本の工芸を牽引する作家を輩出するに至っています。このたびの展示では、陶磁、漆工、木竹工、人形、染織、金工、七宝と実に様々な工芸分野の作家が広島で活躍し、地域の文化を豊かに彩っていることをご覧いただけます。伊万里色絵磁器の名品とともに楽しみください。



奥田小由女《孤愁》1975年 木、桐粉、胡粉



【関連イベント】

■ インスタライブ配信

閉館後の展示室内からギャラリートークをライブ配信します。

① こんなこともしています、美術館3

日時：2021年1月13日(水) 17:00~

講師：角田 新(当館主任学芸員)



公式インスタグラム

② 新収蔵品紹介

日時：2021年2月10日(水) 17:00~

講師：福田 浩子(当館学芸課長)・神内 有理(当館主任学芸員)

■ オンライン対話型鑑賞

冬の所蔵作品展に出品中の作品から、学芸員が選んだいくつかの作品をみんなで話しながらか鑑賞します。

(機材や接続環境、Zoomの操作につきましては、各自でご準備をお願いいたします。)

日時：① 2021年1月16日(土) 14:00~(1時間程度)

② 2021年3月20日(土) 14:00~(1時間程度)

ナビゲーター：森 万由子(当館学芸員)・岡地 智子(当館学芸員)

参加方法：オンライン(Zoom) ※要事前申込【Tel.082-221-6246(当館)】

定員：6名

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、

1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。



◎御来館の皆さまへ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、以下の対策を行っています。ご理解とご協力をお願いします。

■次に該当するお客様は、入館をご遠慮ください。

・発熱や軽度であっても咳、のどの痛みなどの症状がある方

■ご協力をお願い

・マスク着用、手指のアルコール消毒、咳エチケット

・会話は控えめにし、特に大声での会話は行わないでください。

・人と人との接触を避けるため、できるだけ1mの距離を空けてください。

・来館者が多い場合は、入場制限を行う場合がございます。

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail iroeuma2@gmail.com

担当 学芸課 神内 有理

総務課 広報担当 一色 直香、弘津 かおる